

全農第二回中央
常任委員会ニ於ケル

常任委員会 概括報告

農民の貧窮如何

軍需インフレ、輸米インフレ、低金利不頼市工業が著しい活況を呈して居る時、將にそうであるが
爲めに、米と商売中軸とする半封建的農地経営を基調とする（これこそ我が國資本主義發達の爲めに明
治維新以後今日迄政府が農村に強要して来た特殊である）日本の農業と農村の悲慘は、目もあてられぬ
有様となつた。

買値相場は一円二十銭をかり、二円は秋頃の相場だ。十七円で手はなした米は廿七、八円、
東洋と北陸の凶作は確然然だ。凶田凶作は成立二の方、殆んど農民の窮状を眼中にたかぬ様に見える。
米穀商の態度は地主や商人と少しも変わりない。その上、借入達は、養蚕地を以外の地方の窮状をかれこ
れと騒ぐものは嚴重に取締るをいふ。ものしりは蚕糸と米の政策をほろけて喋々と争ひてゐる。
しかし、それが何にもなる。喰ふに困る仕事は無い、土地取上げは、税金借金に追ひ廻される、差押や
へだ、競賣が、金を欲しい、土地が欲しい、根拠賣るのは喰ひがちを減らす爲だ。そして青田賣りが激
増した。黒田賣りがあつた。面白い米と肥料を買ふ爲めに、青田は米の延走相場の四割位安く、黒田
はさらに安く賣るのだ。頼り手講が非常な勢を普及したり、酒、夜の製造自由の要求が驚くほど、真奴
なものとなつてゐたり、するのは米と金のない農民の窮状を端的に物語つてゐる。